

中国古典文学大系 34

平凡社

金瓶梅 中

笑笑生作 小野忍・千田九一訳

訳者紹介

^{オノ シノブ}
小野 忍 1906年東京生。1980年没。東京大学文学部支那文学科卒。専攻 中国文学。訳著書「李家荘の変遷」(岩波書店)「腐蝕」(岩波書店)「現代の中国文学」(毎日新聞社)「中国文学雑考」(大安)

^{チダ クイチ}
千田九一 1912年山口県生。1965年没。東京大学文学部支那文学科卒。専攻 中国文学。訳著書「巢の中の蜘蛛」(写雲舎)「東海巴山集」(岩波書店)

中国古典文学大系 全60巻

金瓶梅(中)

第34巻

1968年8月5日 初版第1刷発行

1983年6月15日 初版第14刷発行

定価 2,500円

訳者 小野忍
千田九一

東京都千代田区三番町5番地
発行者 下中邦彦

郵便番号 102
東京都千代田区
三番町5番地
振替・東京8-29639
発行所 株式会社 平凡社

不良本のお取換えは直接読者サービス係まで 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい(送料は小社で負担します)。製本 株式会社 石津製本所

© 株式会社 平凡社 1967 Printed in Japan

金瓶梅(中) 主要人物一覽

傳番頭 本名は傳銘(フリー・ミン)。西門薬舗に古くからいる番頭。

實地伝(ベン・ティ・チョワン) 西門慶の番頭。通称は貫四(ベン・スー)。

吳典恩(ウー・ティエンオン) もと西門慶の番頭。のち、宰相蔡京によ

って駅丞という官職を与えられる。

韓道国(ハン・タオクオ) 西門系店の番頭。

王六兒(ワン・リウアル) その妻。のち、西門慶と通じる。

王經(ワン・チン) 王六兒の弟。

李桂姐(リー・コイチニ) 廓の芸妓。李嬌児の姪。

李銘(リー・ミン) 楽師。李嬌児の弟。

吳銀児(ウー・イル) 廓の芸妓。もと花子虚の傭い者。

吳惠(ウー・ホイ) 楽師。吳銀児の弟。

鄭愛月(チョン・アイユニ) 廓の芸妓。

鄭奉(チョン・フォン) 楽師。鄭愛月の兄。

応伯爵(イン・ボーチュニ) 西門慶の取巻き。西門慶のいちばんのお気に入り。通称は応二(イン・アル)。あだ名は「花子(ホワツ)」すな

わち「こじき」。

謝希大(シェ・シーター) 西門慶の取巻き。通称は謝大(シェ・ター)。

吳大舅(ウー・ターチュウ) 吳月娘の長兄。親譲りの千戸の職に就いてい

る。

花大舅(ホワ・ターチュウ) 李瓶児の先夫の長兄。

楊おば 原名は楊姑娘(ヤン・クニアン)。孟玉楼の先夫の父の妹。

張四(チャン・スー) 孟玉楼の先夫の母の弟。

武大(ウー・ター) 潘金蓮の先夫。蒸し餅売り。ちんちくりんのぶ

おとこ。

武松(ウー・ソン) 武大の弟。武二郎、武二とも呼ばれる。虎を退治して梟の巡捕都頭(治安隊長)に取り立てられた豪傑。

王婆(ワン・ポー) 武大の家の隣の茶店の婆さん。周旋屋。

薛嫂(シェ・サオ) 花かんざし売りの女。周旋屋。

馮(フォン) はあや 李瓶児の老女中。

如意(ルイー) 李瓶児の息子官哥(クワンコー)の乳母。

夏龍溪(シア・ロンシー) この梟の提刑所の提刑(長官)。すなわち、西

門慶の同僚。

劉(リウ) 太監 劉内相とも呼ばれる。都からこの梟に派遣されて来た太監(宦官)。御料の煉瓦を焼く工場(磚廠)の管理長官。内相は

宦官の敬称。

薛(シエ) 太監 薛内相とも呼ばれる。前者と同様、都からこの梟に

派遣されて来た太監。御料地(皇莊)の管理長官。

翟執事 本名は翟謙(チャイ・チエン)。蔡京の執事。都にあって西門

慶のためにいろいろ便宜をはかる。のち、西門慶の仲介で韓道国の

娘を妾として迎える。

蔡蘊(ツァイ・ユン) 状元(官吏登用試験の首席合格者)出身の官吏。

宰相蔡京の養子。翟執事の紹介で西門慶を訪れ、互いに利用し合う

関係になる。

安忱(アン・チエン) 進士(官吏登用試験の合格者)出身の官吏。同期

生蔡蘊に誘われて西門慶を訪れる。

宋喬年(ソン・チアオニエン) 進士出身の官吏。のち巡按(地方長官)

として山東省に赴任し、同期生蔡蘊に誘われて、西門慶を訪れる。

黃葆光(ホワン・パオクワン) 進士出身の官吏。煉瓦工場の管理長官。

従って劉太監の同僚。同期性安忱に誘われて、西門慶を訪れる。

喬(チアオ) 大戸 西門慶の向かいの家の主人。大戸は金持の意。そ

の娘が西門慶の息子官哥と婚約する。

崔本(ツイ・ベン) 喬大戸の外甥。のち西門吳服店の番頭となる。

李智（リー・チー）李三ともいう。御用商人。応伯爵の紹介で西門慶から資本金を借りる。

黄四（ホワン・スー）李智の相棒。

苗青（ミアオ・チン）揚州の富豪苗天秀の下男。主人に従って船で都

へ上る途中、船頭と共謀、主人を殺してその財物を山分けし、事件

発覚後、西門慶に賄賂を使って逮捕を免れる。

倪鵬（ニー・ボン）秀才（官吏登用試験の受験資格を持つ者。いわば万年受

験生）。夏提刑の息子の家庭教師。

温必古（ウェン・ビークー）秀才。西門慶の祐筆。

目次

主要人物一覧……………前付 五

第三十六回……………三

習謙が手紙をよこして妾を求めること
西門慶が蔡狀元とまじわりを結ぶこと

第三十七回……………二

馮ばあやが韓氏の娘を嫁入りさせること
西門慶が王六兒を物にすること

第三十八回……………三

西門慶がペテン師韓二を痛い目にあわせること
潘金蓮が雪の夜に琵琶をもて遊ぶこと

第三十九回……………三

西門慶が玉皇廟でお祭りをすること
吳月娘が尼僧から説経を聞くこと

第四十回……………三

瓶児が子供を抱いて寵を希うこと
金蓮が少女に扮して愛を買うこと

第四十一回……………六

西門慶が喬大戸と縁組みすること
潘金蓮が李瓶児といがみあうこと

第四十二回……………七

金満家が門を通行止めして花火を上げること
おえらがたが二階で飲みながら燈籠見物をする事

第四十三回……………八

金がなくなつて西門慶が金蓮を怒鳴ること
縁組みをして月娘が喬太太に会うこと

第四十四回……………六

吳月娘が李桂姐を泊まらせること
西門慶が酔つて夏花を指責めにする事

第四十五回……………一五

桂姐が夏花をかばつてやること
月娘が怒つて玳安を叱りつけること

第四十六回……………一五

元宵の夜 遊んで雲に降られること
妻妾たちが亀うらないに興じること

第四十七回 一三

王六児が話を取り持って金をせしめること
西門慶が賄賂をとって法を枉げること

第四十八回 一四

曾御史が提刑官を弾劾すること
蔡太師が七つの件を上奏すること

第四十九回 一五

西門慶が宋巡按を迎えること
永福寺の見送りに梵僧に遇うこと

第五十回 一六

琴童がうれしい語らいを盗み聞きすること
玳安が胡蝶巷でうかれ遊ぶこと

第五十一回 一八

月娘が金剛經の講釈を聞くこと
桂姐が西門の屋敷に避難すること

第五十二回 二〇

応伯爵が洞の中で女をひやかすこと
潘金蓮が庭の中できこえを見つけること

第五十三回 二二

呉月娘が飲びを承けて子供を求めること
李瓶児が願ほどきして息子を救けること

第五十四回 二三

応伯爵が郊外に友だちを呼ぶこと
任医官が西門家で病氣を診ること

第五十五回 二四

西門慶が東京へ誕生祝いに赴くこと
苗員外が揚州から歌童を贈ること

第五十六回 二五

西門慶が常時節を助けること
応伯爵が水秀才を推薦すること

第五十七回 二六

道長老が永福寺の寄付を募ること
薛尼が陀羅經に喜捨を勧めること

第五十八回 二七

金蓮が嫉妬のため秋菊をたたくこと
鏡磨きが肉を欲しさに哀れを訴えること

第五十九回 二八

西門慶が雪獅子をたたき殺すこと
李瓶児が官哥のために痛哭すること

第六十回 二九

李瓶児が腹立ちのため病氣になること
西門慶が呉服屋を開業すること

第六十一回 三五

韓道国が西門慶を酒宴に招くこと
李瓶児が苦痛をこらえて重陽の宴に侍ること

第六十二回 三六

潘道士がお祓いのために星を祭ること
西門慶が李瓶児を亡くして大いに悲しむこと

第六十三回 三八

親戚・友人がお祭りのために宴会を開くこと
西門慶が芝居を見て李瓶児を思うこと

第六十四回 三九

玉簪がひざまずいて潘金蓮にたのむこと
衛の役人たちが富豪の奥がたの供養をすること

第六十五回 四〇

呉道官が柩を迎えて絵姿を見せること
宋御史が西門慶を語らって黄太尉を招くこと

第六十六回 四一

翟執事が手紙に添えて香奠を贈って来ること
黄真人がご祈禱して亡者を救うこと

第六十七回 四二

西門慶が書斎で雪見をすること
李瓶児が夢枕に立つこと

金^{きん}

瓶^{ぺい}

梅^{ばい}

中

千^ち小^せ 笑^{しょう}

田^だ野^の 笑^{しょう}

九^く

一^い忍^{しのぶ} 生^{せい}

訳 作

第三十六回

翟謙が手紙をよこして妾を求めること
西門慶が蔡狀元とまじわりを結ぶこと

富川から見りゃ劍江の西は

夕陽にひとつちぎれ雲

涙出すなら思い切り流せ

手紙たのむに雁も居ず

安否たずねてはや三千里

二六時むなしくさするうて

青空海原思いは絶えず

帰り行く日を誰が知る

さて、翌日西門慶は朝早くから、夏提刑といっしょに郊外へ出て、新任の巡按を迎え、それから村屋敷へいって、そこで仕事をしている職人たちの労をねぎらい、暗くなつてからうちに帰りました。すると平安がはいって来て、

「きょう東昌府の飛脚が、都へいったついでだと申しまして、手紙を一通持ってまいりました。太師さまのお屋敷にいらっしゃる翟さまのところから、旦那さまによこされたもので、わたくし受け取って、大奥さまのお部屋まで届けておきました。その人が、あすの午後、返事をもらいに来るそうです」

西門慶はそれを聞くと、奥座敷へいって、手紙を取り上げ、封を切

って読みましたが、それにはさて、どんな文句が書いてあったか。

大錦堂西門大人門下

京都侍生翟謙頓首

前略、久しく御高名を仰ぎ居り候も、未だ尊顔に接せず、たびたび御厚情を辱うして、恐縮に不堪候。さきごろお申越しの件に就いては、小生心に銘じ、万事老爺の側近に在りて極力お取持ち申上候次第。その節はまことに身勝手なる小事を貴方の御家人に委託し、種々お手数を相煩わし申候処、さだめし既に宜しく御取計らい下されたことと存じ、いま幸便に因り、些少なながら金札十両を御礼として相整え、兼ねて御機嫌伺いに及び候間、何卒御返事賜わり度、小生感激の至に堪えずお待ち申上候。なお新狀元蔡一泉殿は、老爺の御養子にて、このたび勅を奉じて原籍地に帰省致さるることと相成り、途中貴地にお立寄りの筈に付、然る可く御接待の程願上度、さるうえは若殿にてもゆめゆめお忘れには相成るまじと存じ候。末筆ながら呉々も御自愛の程祈り上候。

秋後一日記

西門慶は読みおわると、しきりに溜息ばかりついておりましたが、「おい、早く小者に、周旋屋を呼ばせろ。なんとしたことだろう、すっかり忘れていて、ちっとも気がつかなかった」

「どうしたというんです。わたしに話してくださいな」
と呉月娘がたずねると、

「東京の太師さまのところの、翟執事から、いつぞや手紙をもらって、子供がないからこちらでひとり、女を捜してくれとたのまれていたんだ。貧乏人でも金持でもかまわん、お金はいくらかかって結構、器



第二十六回

翟管家寄書尋女子

量さえよけりゃいってことなんだ。あの人、子供がほしいんだよ。嫁入り道具や礼金など、いくらでもかかっただけ知らせてくれ、いちいちお払いするからってことになっている。それ以来、殿さまの前でできるだけうまくおれのことを取り持ってくれて、役人にもなれたんだが、おれもあれからずっとこたごたして、役目についてもいろいろと用事に追われ、そいつをすっかり忘れちまって、思い出せなかった。来保は来保で、毎日店のほうへ出てばかりいて、ちっともそのことに触れないし、それできょうまた、あの人のはるる人に手紙を持たせ

「きょう東昌府の飛脚が、都へいったついでだと申しまして、手紙を一通持ってまいりました……」

て、縁組みの件はどうなったかときいてきたんだ。おまけに十両の手付までよこして、あすその使いの者が返事をもらいに來るってことなんだよ。ねえお前、どんなぐあいに返事をしたもんだらう。このままじゃ、あの人にかんかんに怒られちゃうぜ。周旋屋を呼んで、ぜひとも大急ぎで捜すよう、お前言いつけてくれよ。金持だろうと貧乏人だろうとかまわん、器量のいい娘でさえありゃいいんだ。年は十五六か、十七八ってところでいいだろう。お金はいるだけおれのほうで渡すから……もしもうまくいかなかったら、李ねえさんこのの**綉春**、なかなかの器量よしだから、あいつをくれてやろうよ」

「だからあなたは、足に火がついてあわてた唐変木だつていうんですよ。この二三月のあいだに早くなんとかしてお置きになりゃよかったものを……人が折り入ってたのんできたんだから、ちゃんとした娘を世話してあげりゃ、先さまだって十分お礼をしてくださいますよ。あの女中は、あなたがもう手をつけてるんだから、とてもゆかせるわけにゃいかなきゃないの。あなたが一仕事やつておあげになったら、先方だって、そのうちやつぱりあなたのために骨を折ってくださるんですわ。それをいま、やれ仏をつくれの、焼香しろの、なんていったって、こんな急場になんてまにあわせられるもんですか。買物をするのとわけが違いますよ。それならお金を持って、市場へゆけば、すぐ買えますがね。良家の箱入り娘な

なんてものは、どうしたって同じわけにはいかないんだから、やっぱり周旋屋にたのんで、ゆっくりと捜してもらうんですね。あなたが好きなようにお話しになったらいいじゃありませんか」

「あした、返事をもらいに来たら、なんて答えるんだい」

「それはやっぱりあなたがおきめになることですわ。そんなことぐらい、人を煩わさなくたっていいじゃありませんか。その人があしたやって来たら、ちょっとばかり小づかいをつかませて、手紙を持たせて返すのよ。娘はみつかったけれど、着物や嫁入り道具がまだそろわない、もうしばらくしたら全部整うから、それができたらこちらから人に届けさせるというてね、そうしてゆかせておいてから、こちらで誰かに捜させりゃいいじゃないの。これこそ一挙兩得、そうやって取り持ってこそ、たのまれ甲斐があるっていうもんですよ」

「なるほど、もっともだわい」

西門慶は笑いながらそういうと、陳經濟を呼び出して、夜通しがかりで返事を書きあげ、あくる日飛脚がやって来ると、西門慶みずから出て来て、いろいろと細かな点を聞いただし、それから蔡状元の船はいつごろ到着するか、ちゃんとお迎えの用意をしておかねばならぬがとたずねます。するとかの男、

「わたくしがまいりますときは、蔡さまは朝廷からお暇をおもらいになって、都をお立ちになったばかりのところ、翟さんがおっしゃるには、蔡さまがご帰郷なさるのについて、ひょっと路銀が足りなくなるかもしれないから、そのときはこちらの旦那さまにいくらかでもお立替えをお願いしたい、手紙をよこされれば、ちゃんと耳をそろえてお返しするから、とのこと」

「あなた、帰って翟さんにそう申し上げてください、いくらでもご入用なだけ、わたくしのほうでご都合いたしますからってね」

西門慶はそういうと、陳經濟に命じて廂房のほうへ案内させ、いろいろと馳走でもてなしました。そして帰りがけに返書を渡したうえ、五両の路銀を与えますと、その男は厚く礼を述べ、すっかり喜んで門を立ち出で、はるばると旅立ってゆきました。まさに、「先を急げば宿場もゆるぎ、あせりや碎ける紫花の鞭」というところ。

皆さん、お聞きください。もともとそのときの進士試験の第一席は、安忱が取ったのですが、安忱は先朝の宰相安惇の弟で、反対党の子孫であるから、これを進士の第一番にすべきではないという御史の論議により、徽宗皇帝におかれてもやむをえず、蔡蘊を一番に引き上げ、これを状元にして蔡京の門下に入れ、その養子として秘書省の正字という職に就かせたもので、このたび暇を賜わって故郷に錦を飾ることとなった次第です。

さて、こちら月娘のところでは、小者に馮ばあやや薛嫂をはじめ、ほかにも周旋屋を呼んで来させて、あちこちのうちに当たってみて、いい娘がいたら、身許書を持って知らせられるように、と申しつけましたが、その話はお預りといたしましょう。

ある日、西門慶は来保を新河口までやって、蔡状元の船のことをきかせましたところ、この船には、同期の進士である安忱も同船していたのでした。この安進士というのも、家が貧しいため、いまだに後添えがなく、東も不首尾なら西もだめといったぐあいなので、朝廷からお暇をいただくの家へ帰って後添えをめぐることになり、それでふたりは同船して、新河口までやって来たわけです。来保は西門慶の名刺を持って船まで会いにゆき、さっそく酒・麵・鶏・鵲鳥・つまみの塩・味噌といった品々を届けました。まして蔡状元は、東京で翟謙から、

「清河県には、殿さまの門下で西門千戸というものがおりまして、た

いへんな豪家、金があつてなかなか仁義をわきまえておりますが、これも殿さまのお引立てにより、いま理刑の役に就いております。あそこへゆかれたら、きつとあの男、手厚くもてなしてくれるはずでございます」

と前もって話されていて、すっかり心に刻み込んでいたのですから、西門慶が使いの者をよこしてわざわざ出迎えたうえに、こうした立派な贈り物を持参したのを見て、心中はなはだ喜び、あくる日はさっそく安進士とともに、西門慶に会いに城へはいつて来ました。西門慶はちゃんと料理番に言いつけて、家に酒席の用意をし、いつか李知事の役所で酒を飲んだおり、とても唄がうまい蘇州役者の一座がいたのを見ていたので、どこに住んでいるかと書童にたずねてみましたところ、書童のいうには、

「南門外の磨子宮に住んでおります」

といったので、さっそくその四人を呼んでお相手させることにしました。蔡状元はその日、絹布一反・書籍一部・縐子靴一足をお土産にし、安進士も、書帕(上巻第三十四回注三参照)・芽茶四袋・杭州扇子四本をたずさえ、いずれも礼服に黒の紗帽といういでたちで、まず名刺を通じて中へ通ります。西門慶は冠姿も凛々しく、これを迎えて広間へ通すと、互いにあいさつの礼を取りかわし、家の小者が初対面の贈り物を献上したのち、主客別れて席に就きました。まず蔡状元が手をこまぬきながらあいさつして、

「京師の翟雲峰が、尊公のことをさかんにほめたたえ、代々の名家、清河の豪族などと申しております。かねてより、ご徳望はお慕い申しながら、これまで直接お目にかかることができず、いまかくは面謁(めんぎやく)となつて、はなはだ仕合わせに存じます」

といえ、西門慶答えて、

「それはそれは、恐れ入りましてございます。昨日、雲峰どのからお手紙がまいつて、両先生がお船でお越しと書いてありましたもので、あたりまえならお迎え申し上げねばならぬところ、なにしろ公事に縛られておりまして……どうか、ご容赦のほどお願いいたします」

そこでたずねて、

「して、おふたかたのご郷里や尊号は？」

「小生は蔡縉と申し、本籍は滁州(安徽省)匡廬(くわいろう)の者。賤号は一泉。さいわいにも伏元となり、秘書正字の職を拝し、このたび賜暇省親のお許しを、皇上よりいただいた次第。ところが、はからず雲峰先生、尊公の盛徳をほめたたえておりましたので、おそまきながら参上つたまつりました」

と蔡状元がいえ、安進士、

「小生は浙江錢塘(せんとう)の者、号を鳳山(ほうざん)と申し、ただいま工部觀政の職に叙せられておりますが、やはり休暇を賜つて故郷へ後添えをめとるために帰るところ。……して、尊公の号は？」

「取るに足らぬ武職にありますが、なんの号などというものが……」

と西門慶は遠慮しておりましたが、再三たずねられるので、
「賤号は四泉と申し、度重なる蔡の殿さまのご推挙や雲峰どののお引立てにより、錦衣千戸の職を襲ぎ、理刑に任じられておりますが、實際には役に立つものではございません」

という、蔡状元が、

「いやいや、尊公は非凡な抱負の持主、世間でも人望のあるおかたです。そうご謙遜なざるものではありません」

あいさつのことばがおおると、庭の数寄屋へ案内し、くつろがせようとしましたが、蔡状元は辞退して、

「小生、しきりに里心がおこり、船も岸で待つておるし、すぐさま帰

りたいところなのですが、こうして尊顔を拝してみると、なんだかまた去りたいところもあり……はて、いかがいたしたもののやら」

「かようなむさくるしいあばらやをお願いでなければ、ご両公、どうか、しばしのあいだ、お留守りのほどを、粗飯なりと差し上げたいもので……」

「それほどまでのご芳志とあれば、小生もおことに甘えることにいたしましょう」

そういうながら、着物をぬいでふたりが腰をおろすと、付添いの小者がまたお茶をいれて持ってまいります。蔡状元は、西門慶の庭園のたたずまい、池や館や立派な花木の茂みが果てしなく広がっているを見渡して、心中大いにうれしく、

「これこそまことに、蓬萊にまさるものです」

と口をきわめてほめそやします。それから碁盤を運んで来て、碁をはじめました。

「じつはきょう、役者を三人呼んで、控えさせてあるのです。ご両公のお慰みにもと存じまして」

と西門慶がいえば、安進士、

「どこにいるんです。早く呼び出して、見せていただきたいが……」

やがて四人の役者がひざまずいて叩頭しますと、蔡状元がたずねて、「どのふたりが男役で、どのふたりが女役になるんだい。名前はなんという」

そこでひとりが進み出て、

「わたくしは立役で、荀子孝と申します。そちらが女役の周順。次が脇女役の袁球。あとのひとりが若役で、胡慥と申します」

と述べれば、安進士が、

「お前たちはいずれの若者だ」

「わたくしども、みんな蘇州人でございます」

「では、ともかく扮装して来て、うたってみせてくれ」

四人の役者が扮装のため下手のほうへ下がってゆくと、西門慶は奥の者に命じて、女の着物や櫛・簪を出させ、書童にも扮装させましたので、全部で三人の女役とふたりの男役ができあがり、席上でまず「香囊記」をうたいはじめました。大広間の正面にはふたつの席が設けられて、蔡状元と安進士がそれに陣取り、西門慶は下手の主人席に

いて、お相手をしております。そうして飲んでいるうち、唄の一段がおわったところで、安進士は書童が若女役に扮しているのを見て、

「あの役者は、どこの者で」

ときくと、西門慶、

「あれは拙宅の小者で、書童と申します」

安進士は呼び寄せて、酒をふるまいながら、

「この子、なかなかうまいぞ。申し分がないな」

蔡状元は蔡状元で別の役者たちを呼び寄せて、これまた褒美の酒を飲ませます。そうしてこんどは、

「ひとつ『朝元歌』の曲をうたってくれ。『花のほとりや柳のへ』だ」

と申しつけますと、荀子孝がかしこまって、かたえで手拍子取りながら、うたいました。

花のほとりや柳のへ、軒端にかかる青すだれ、山の麓や水のそば、馬上をなでるこちの風、あさすらいの旅の鳥、わが家恋し里恋し、沈む魚かや行く雁か、誰に告げようこの愁い、忘れな草に日は沈み、夢見る夜のわびしさよ。(合唱) 路もはるけき洛陽の、金殿に上るはいつの日か。